



海美婦
 林二編
 上

^ 13
 2901
 4



合

門 13
號 2901
卷 4

昭和九年
七月五日
購求

考
人
情

考
人
情
一
家
元
祖
梅
屋
知
辰
巳
國
中
開
闢
以
來
本
意
の
も
乃
曰
す
ま
ま
其
代
の
興
味
の
よ
く
婦
女
の
事
を
論
じ
て
進
歩
の
道
を
示
す
善
く
好
む
者
な
大
人
の
高
評
好
む
人

中事を。振えたる。ふるまひの。為。永。社。中。の。事。
 ま。で。日。本。中。の。大。平。一。統。の。物。語。
 通。辭。を。お。も。ひ。の。唐。天。竺。の。場。上。へ。も。
 清。見。の。負。荷。が。ふ。米。八。好。好。者。の。事。
 古。今。の。果。報。者。の。善。惡。が。生。國。で。あ。ら。う。
 米。八。の。新。行。を。お。も。ひ。の。米。八。と。

改。名。せ。し。新。妓。の。現。み。上。の。事。は。知。ら。ず。
 一。の。先。の。夏。の。昔。の。事。類。
 一。の。故。を。世。に。傳。へ。る。事。
 一。の。大。江。戸。の。玉。に。あ。り。し。事。
 一。の。浮。世。の。善。惡。の。事。
 一。の。地。下。の。事。の。事。の。事。の。事。

舟乃壙人好いよき。わき吉丸
 であしむはせえり。酒名を
 申しつゝのうま。あまはあま
 昔のうまはあま。あまはあま
 是れよ。あまの代作人。あまはあま
 あまはあま。あまはあま

あまはあま

東林人情本一流の元祖
 狂言老人の門葉あま
 長谷古屋の好男子の年
 江戸の子孫仲間入する為連
 市谷 芳訓亭為永春華の道途





新坂の箱庭

おとるを

川柳魚の

風調ふ

あまのて

聖あまのよ別荘の

隣の家さぬ

王枝

春色梅美婦衿巻之四

梅園英對の拾遺

江戸

為永春水著

第七回

一 江戸八さん 自分勝手ぞ けふの梅よりと来るを
 氣に張らるゝ 實に酒も呑らるゝ ねえおの
 於元の風体が 遠のく梅さ 木一左衛門之巻
 白の葉香さん 判でしりさか 家初お梅さ
 二 二平 後込んと梅さと思つらけ ねえおの
 梅さ 梅さ 梅さ



解らるる言ひヨレ申入るおが言ひの一人の言ひ
初まそわぶが實に丹さんも史たるるま八の子
第で初る人びよるのこころ思はれ
算利が愛ひとおよ毎度言とお國せ
極不我の居るのこころ言ひまの
公の居るの御のよすまのヨお茶の
字 極が又お茶のこころの
精のり 面白ひは方もお茶の
お茶の

如彼見ると教もまの八風情に漢合員を
あつた他人のまの教もまの
私を實にせする身段もお茶の
まの造化もまの
茶をまのお茶のこころお茶の
お茶も好まを
何程してもお茶のこころ
然言ひて居ると信實のゆゑに両女とも

金の波を播く見下るに花の波を切らぬ
 新祝の埜割うやのテはへ真実の
 都鳥もねまきどー

富王飛波
 右左
 都鳥



都鳥もねまきどー
 都鳥



第八回

帰るまの送不図金の里の
 高院街門跡西の向の河
 都鳥もねまきどー
 都鳥

名所く都人も賞ぶるを東へたむきの耳言ふ
ま実ふ終る糸の海りて梅更めのつる花の埋れ絶
舟と降るの扱ひ雪月花の風流三國を攻とり入る
のく室ふ彼来八うまうし家根船へうわとり入る
屋のくもよのめひありうが来八うまの覺くる物も
踐りて来者が房々の發後ようたなうて舟はあめ
アサお侍るふへト室のふるうま侍れまげぶうら
り坂舟腹の海かしてトあめあめふらぶらあまたト

舟の中へはるまを船の者も折居を
三つに提げく峯及糸の供きとぶらうし
髪をわらう青く目即ひまの船を成まあめぶか
おまのまはヨト言るがく港板と押へて実ハライ
トおをわらう青く糸の持もうし折居をうけら
笑へお大かおは肉が海ままうトあめぶら
おまのまは峯アイト大丈夫サドト言るく港板を
うらむる梅ふらうけてちよると飛ぶのう見まぶ今

先へまゐるる茶古房古本八の三人とも小病なる風
俗をまて居るゆゑ 峯へマヤ一不殘病の極まで居る
の喉が葉を造る極までトリひひらき 客の因入違入
コトカ... 十三人ふ一時に死す 米へマヤ峯さん
定ふま待草外まへマヤサマハ折の真中へお這入
任成ヨ 定へマヤハサマハ折へお出を成ま 峯へドラ
如かりくマヤ下完屋まへマヤサマハ折へお出も角も
ままの極まで定へマヤハサマハ折へお出も角も

を成ま... 峯へマヤハ折へお出も角も
強弱に碎や... 峯へマヤハ折へお出も角も
今この極まで... 峯へマヤハ折へお出も角も
申へ... 峯へマヤハ折へお出も角も
峯へマヤハ折へお出も角も
うら持て... 峯へマヤハ折へお出も角も
久鳥が庭の梅へ別ふ... 峯へマヤハ折へお出も角も
米へマヤハ折へお出も角も



當の由むら 出来まゝのサマ 移るをとも
向之もこのへん 大まか 回らるまは 向の越の
衆もよりサマの 信の 移のけきとも
程の人が 移らる 仕ません 峯のまを
言中れは 新の 移のまを
さん 新の 野のまを
ま直ぐけ 好情な 移のまを 峯のまを 本繪のまを
のまのまの 移のまを 移のまを 移のまを

可奈ノウト 言物より 舟のまを 金波樓の下の 移
移のまを 移のまを 移のまを 移のまを
おは賀の知へり 移のまを 移のまを 移のまを
用のまを 移のまを 移のまを 移のまを
人判次第の 身の 上の 移のまを 移のまを
外のまを 移のまを 移のまを 移のまを
中は 移のまを 移のまを 移のまを 移のまを
生保も 移のまを 移のまを 移のまを 移のまを

しきくサシタハ
はるの兄中を勤めしのころ
見そ居る仲ふ候がとむ
だつて実ふか彼兄中へ
糸香の糸を見まは候と
ねど恋ころふを他へ
山そのよせしむら
親よとせしむら
和合頼母しく思へり

春水田をちの糸香
恋意と同一の
底并八仇台の青く
又曰は候の春の
春色梅美婦祢卷之四

